

## スペインの庭(3)<sup>1</sup>

鳥 居 徳 敏

### 7. アルハンブラ

ナサリ朝はスペイン最後のイスラム王朝であり、グラナダはその首都であった。そして、その王宮がアルハンブラである。アルハンブラとはアラビア語で「赤い城 al-Qal'a al-Hamra'」を意味し、王宮それ自身を指す名称ではない。グラナダ盆地の小高い丘サビカに聳える全長約2.2kmの城壁と22塔で囲まれた『赤い城』は、それ自身で立派な中世都市としての規模があり、機能的にも城塞都市「カスバ」であった。この城壁に囲まれた都市は城塞、王宮、そして市街区で構成され、この後者には様々な王族や重臣の邸宅も建設されていた。また、谷を隔てたもう一つの小高い丘「太陽の丘」にも、夏の離宮『ヘネラリーフェ』が存在する。これらの王宮や離宮に現存する庭のほか、市街区の邸宅にも庭園の遺構が残り、あるいは遺跡が発掘されている(図1)。

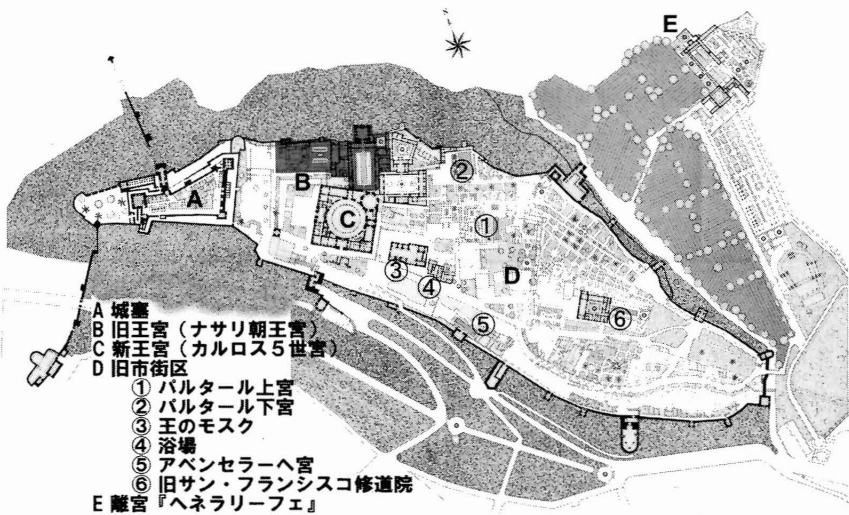


図1 アルハンブラ配置図 (Patronato de la Alhambra)

1232年、ハエン近くのアルホーナでムハンマド1世 Muhammad ibn Yusuf ibn Nasr ibn al-Ahmar (1194-1273) がイスラム教徒たちによりスルタンと宣言される。これがナサリ朝の始まりであり、同王が1237年グラナダを征服し、自らの首都としたことから、同王朝はグラナダ王国とも称される。ナサリ朝の居城が城塞都市アルハンブラであり、これが1492年カトリック両王により開城されることによりスペイン最後のイスラム王国は消滅した。このことからナサリ朝グラナダ王国は1237-1492年とされる。ただし、その開始年を1238年とする記述も見受けられるが、これはイスラム暦であるビジュラ暦と西暦では年始年末が一致しないため、日付まで判明しない限り、こうした年号のずれはしばしば起こる。

イスラム都市グラナダの旧城塞（王宮）は、元来、現アルバイシン地区に存在し、これを中核として都市が形成された。ムハンマド1世はこの旧城塞を捨て、反対の丘サビカにアルハンブラを1238年に着工する。これは新築ではなく、11世紀に建設された城塞跡を利用するものであった。ただし、この場所にはそれ以前からも城が建設されており、14世紀イスラムの大歴史家アル・ジャティブは、サワル・アルカイシからの引用として、この城もまた「赤い城」と呼ばれ、9世紀後半の建設だと述べる<sup>2</sup>。

アラビア語資料によれば、ムハンマド1世はアルハンブラへの水路網の整備、城壁全般、および城塞部を建設した<sup>3</sup>。ただし、その息子の2代目ムハンマド2世 (1273-1302) が城壁工事を継続し、要塞としての防備施設を完成させたと考えられている。フェルナンデス・プエルタスなどは、城塞部以外の市街区全域の城壁を2代目の建設としており、同ムハンマド2世の時代にアベンセラーヘ宮、パルタール上宮、さらには旧サン・フランシスコ修道院が建設されたとする<sup>4</sup>。ビルチェスはパルタール上宮が同2代目の王宮であったことを指摘する<sup>5</sup>。他方、3代目のムハンマド3世 (1302-09) がカルロス5世宮東側の最も小高い場所に位置した王のモスク (16世紀サンタ・マリア教会堂に建替えられる)、すなわちアルハンブラ市街区のモスクと同浴場を建設していることから、同王が市街区整備に着手していたことが窺い知れる<sup>6</sup>。また、パルタール下宮が同ムハンマド3世の王宮であり、同王の時代に前記したアベンセラーヘ宮や旧サン・フランシスコ修道院が建設された説も根強い。同様に、離宮のヘネラリーフェもムハンマド2世か3世の建設とされている。いずれにしても、同3世の時代までにアルハンブラ

の市街区骨格は整備されていたであろうと推測される。しかし、現存する旧王宮として知られているアルハンブラは、その大部分がナサリ朝最盛期の7代目ユスフ1世(1333-54)、およびその息子の8・10代目ムハンマド5世(1354-59, 1362-91)の手になり、前者王宮がコマーレス宮、そして後者王宮がライオン宮に相当する。これ以降、グラナダ王国が滅びる15世紀末まで、重要な造営はなされていない。

したがって、本稿で論ずるアルハンブラに関わる庭園は13世紀最後の4半世紀から14世紀に出現したことになり、年代的には前稿で扱ったセビーリャ王宮の『十字路パティオ』改造からペドロ王宮建設まで、および同じ14世紀のグアダラハーラ王宮やトルデシーリャス王宮の建設時期に重なる。アルハンブラの庭園を考えると、この点は特に注目すべきことであろう。

### 7.1 パルタール上宮

以前ユスフ3世(1408-17)の王宮と考えられていたこの廃墟は、キリスト教徒再征服後、カトリック両王によりアルハンブラ初代守備隊長 *alcaide*、かつグラナダ王国方面総司令官イニゴ・メンドーサ(初代モンデハル侯爵、及び2代目テンディーリャ伯爵)に贈与されて以来、改造されて同貴族の邸宅として存続した。この事実からして、アルハンブラで同邸宅はカトリック両王が使用した旧王宮、すなわちコマーレス宮とライオン宮に次ぎ重要な建築であったに違いない。しかし、相当以前から廃墟化していたこの敷地を1929年国家が買い取ったときには、全くの廃墟で古の面影はなかった。同年からアルハンブラ保存建築家トーレス・バルバスにより発掘調査され、一部図面化されたものの、南側敷地は私有地のままであり、現在に至るまで全貌は判明していない。前記したように、ビルチェスの指摘に従えば、この廃墟は2代目ムハンマド2世の王宮跡であり、初代ムハンマド1世の居住場所が城塞の塔内に想定されていることから、アルハンブラでの最初の本格的王宮であったと考えられる。

トーレス・バルバスの図面と現状をベースとしてオリウエラとビルチェスがそれぞれの同王宮の推定平面図を作成している(図2)。前者が大きな池のパティオを中央コアとした部分のみを王宮とするのに対し、後者は西側の家屋2棟とさらに西側に広がる庭園部を含めムハンマド2世の王宮と推定する<sup>7</sup>。

西側庭園部は南から北に下がる傾斜地であり、幅約60mの区画壁で4分割され、

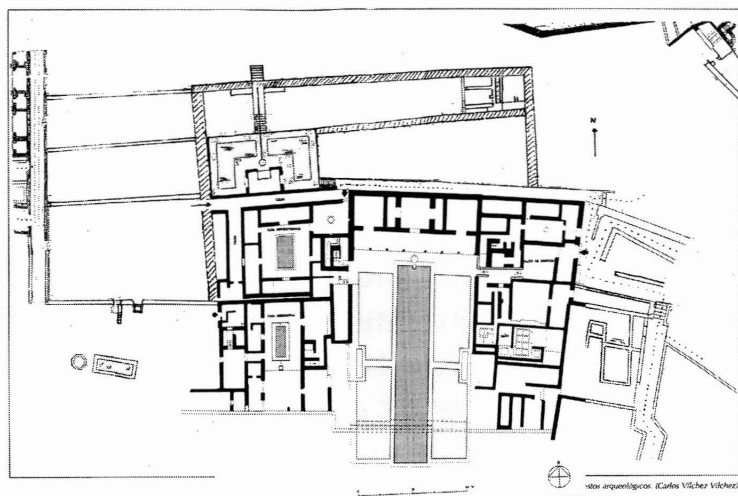


図2 アルハンブラ、パルタール上宮(Vélchez図面とOrihuela図面の合成)

段状に造成されていた。最も高い南側庭園には八角形の噴水と長方形の池が残るものの、イスラム時代の面影は全く見られず、それらの機能を想定することができない。さらに南には『王のモスク』に所属した浴場の大きな池の跡も見られる。1920年と23年の発掘調査にも関わらず、当時の庭園部の様相を推測するには至っていない。この4分割された段状庭園の高さに対応して、王宮西側部は4つにゾーニングされている。南側の高い庭園に対応した2家屋、その下の2段目には前面に2つのコの字形の池をもつ展望楼が存在し、その前に階段が配され、パルタール下宮と分割する擁壁が境界壁を形作る。この南側家屋と大きなパティオの王宮部は南側が未だ発掘されていないためその全貌は判明していない。この王宮への入口が東側北部の想定されており、その入口から小さなパティオを介して中央の大パティオに達する。この小パティオ周辺に付属施設が配され、その南側には浴場跡が見られる。正面玄関は南側の未発掘部分に存在したであろうと推測される。北東部の入口は裏口であろうし、ここから裏側の城門『鉄の門』に抜け、離宮『ヘネラリーフェ』に行くことができる。王宮部本体は細長い大きな池のパティオ(図3)を中心に構成され、北東部に入口を含む付属施設、南東部に浴場が配される。





図3 パルタール上宮、王宮パティオ



図4 同左、西側北家屋パティオ

ビルチェスは池の両側に植栽庭園、北側中央にはクッバ（謁見の間）と前廊を推定する。大きな池を中心としたパティオ形式はグラナダ王国の雛型と言えるほど多数存在（グラナダ病院1367、同じ14世紀に属すグラナダのサフラ邸 Casa de Zafra、チャピス邸 Casa de Lorenzo el Chapiz、同世紀または15世紀のヒロネス邸 Casa de los Girones、15世紀のオルノ・デル・オロ通りの住宅 Horno del Oro など）し、同王宮西側の2家屋（図4）もその例外ではなく、その代表例は『コマーレスのパティオ』に見られる。ただし、ビルチェスが推測するように十字路パティオの縦軸が池に変換された四分庭園の伝統を読み取ることもできる。

東西に延びる小路がこのパルタール上宮の北壁に沿って走る。東端は北に下って行き『鉄の門』に達し、西端は直進すれば下り階段で2つの鉤形池を持つ展望楼テラスに、同階段前で南に曲がれば王宮西側の北家屋玄関パティオの入口に、その入口に入らず同家屋北壁沿いの小路を西進すれば、西側の庭園部に達する。こうした小路の配置から、西側家屋がパルタール上宮に付属するとしても、鉤形池の展望楼テラスは同王宮から分離しているように推測される。このテラスを西側庭園部の一部と考えるのか、あるいはビルチェスが想定するように、前方の階段テラスを繋ぎの装置としてパルタール下宮に属す庭園と考えるかは、にわかには断定できない。

## 7.2 パルタール下宮、ムハンマド3世（1302-09）

このパルタール下宮は現在知られている『パルタール』（図1-②）を指す。旧王宮『ライオン宮』の東側に位置するこの王宮は、北側の広間=柱廊とクッバが

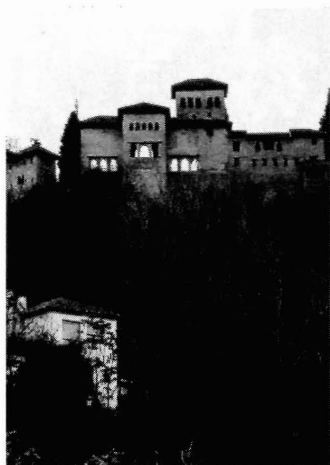


図5 パルタール下宮、北側外観



図6 同左、鉤形池からの庭園側外観

城壁に馬乗りになり、塔建築を形成する。その庭園側前方に柱廊のアーケードを映し込む大きな長池（約13.5×25m）があり、さらに南側の一段高くなったテラスの階段を上ると、前項で述べた2つの鉤形池を持つ展望楼テラスに達する。この望楼からは大きな池に「柱廊」を映し込む眺望を楽しむことが可能であり、ここまで下宮が広がったとしても決して不思議ではない。その「柱廊」を意味する言葉が「パルタール」であり、広間の内部装飾からムハンマド3世の時代の建設と考えられている。そして、同王の王宮と考えられるこちら側を『下宮』、前述した南側のムハンマド2世宮が位置的に高い場所にあることから同名の『上宮』と命名されるようになった。13世紀末から14世紀初めにかけては、現在の旧王宮部分にもこの『下宮』に類似した塔建築が並び、同様の庭園が広がっていたことであろうことが推測される。例えば、5代目イスマイル1世（1314-25）は現『コマーレスの塔』の場所にそれより小規模の塔建築を建設しており、そ

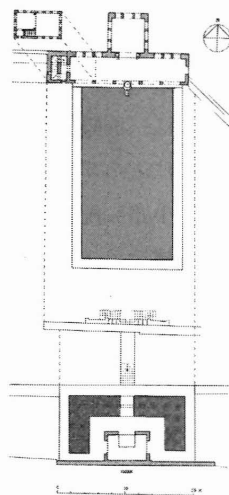


図7 パルタール下宮、平面図（Orihuela）

の孫の7代目ユスフ1世がこれを増築して現在のものにしたのである。

建物を映し込む池を前面に配す方式はすでにマディナート・アル=サフラに出現したもので、目新しいくはない。しかし、池に面した広間はアーケードで全面的に開放され、柱廊のようでもある。この広間越しに主サロンのクッパに達する。北側の森の上に聳える『ダーマス（淑女たち）の塔』に位置するこのクッパからは、対面の丘に広がるアルバイシン地区やサクロモンテの眺望を楽しむことができる。このクッパのみならず、広間の北面も窓で開放され、いかなる場所からも南側庭園と北側絶景が眺められる。さらに広間西側2階には2間よりなる展望台があり、階段部を除く全壁面に開口部が穿たれ、前後左右のパノラマを享受できる。まさに摩天楼より見る風景を味わうことができる。ある意味で、この王宮は大庭園のなかの東屋でもあるのだ。

大きな池の左右、すなわち東西両側がどうなっていたかを推測できるような資料は存在しない。東側の城壁上に建設された小モスク（礼拝堂）はユスフ1世の時代のものであり、西側の『パルタール下宮』に接し同じく城壁上に建設された家屋も同じくユスフ1世時のものと考えられていることから、これらの遺構からはムハンマド3世宮の庭園の東西の両側の様子を推測できないのである。

### 7.3 アベンセラーヘ宮

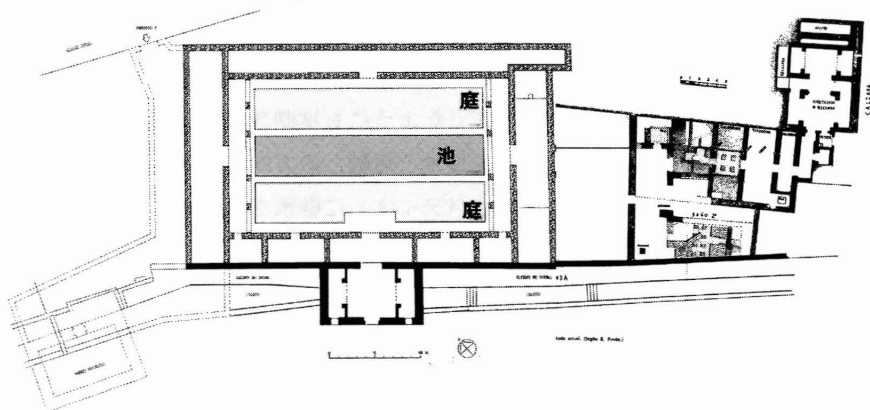


図8 アベンセラーヘ宮、推定平面図（Orihuela図面とPavón図面の合成）

『王のモスク』（図1・③）南東の城壁に接するアベンセラーヘ宮（図1・⑤）は、『パルタール下宮』と同じく、南側主サロンのクッバが城壁に馬乗りになった塔建築であることから、王族に匹敵する重要人物の邸宅であったであろうことが推測される。事実、アベセラーヘ家は王家と密接に関係する家系であり、時には王位継承に際し、重要な役割を演じていた。ライオン宮の南側クッバ『アベンセラーヘ族の間』も同じ家系に関わる残虐な

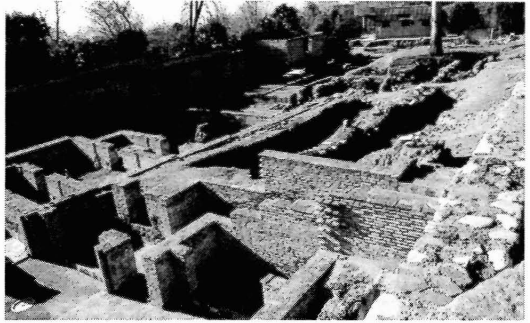


図9 アベンセラーヘ宮、発掘現場

事件に由来する名称である。前記したように、ムハンマド3世の時代と推定されるが、ナサリ朝建築としては極めて初期の段階の様相を呈すことから、2代目、すなわちムハンマド2世の時代とも推定されている。

かなりの部分が発掘されており、その規模は王宮にも匹敵するものである。東側の発掘部には大小2つの浴場が見られ、その北東の端部には「休息の間」の存在が推定されている。塔建築のクッバ北側に邸宅本体が広がっていたことであろう。オリウエラの推定復元によれば、中心の長方形パティオ（約25×17m）は東西の短辺に柱廊と広間を配し、両者を繋ぐ長軸中央の池により2分割された植栽庭園を持ち、南側中央には前記したクッバが位置する<sup>8</sup>。この南側植栽庭園へのクッバ前欠き込みはムハンマド2世の『パルタール上宮』庭園部の欠きこみに酷似し、こうした欠き込みが一般的であったようにも推測される。形式としてはセビーリヤ王宮の『石膏のパティオ』を長軸と短軸との方向性を変換したものと言えるであろうし、後の『コマーレスのパティオ』に継承されるものであろう。

東西両側に配された柱廊と広間の構成はこちら側での主要室の存在が示唆される。しかし、南側中央のクッバはその構成から、さらなる重要性が推測される。その重要性は望楼としての機能を持つことに反映されよう。このクッバからは南に広がる広大な自然が満喫でき、現在は森林のパノラマを享受できるのだ。ここでも人工の庭園パティオから大自然の眺望へと連続し、クッバが庭園のなかの東屋的機能を有しているのである。

#### 7.4 旧サン・フランシスコ修道院、ムハンマド2世（1273-1302）またはムハンマド3世（1302-09）

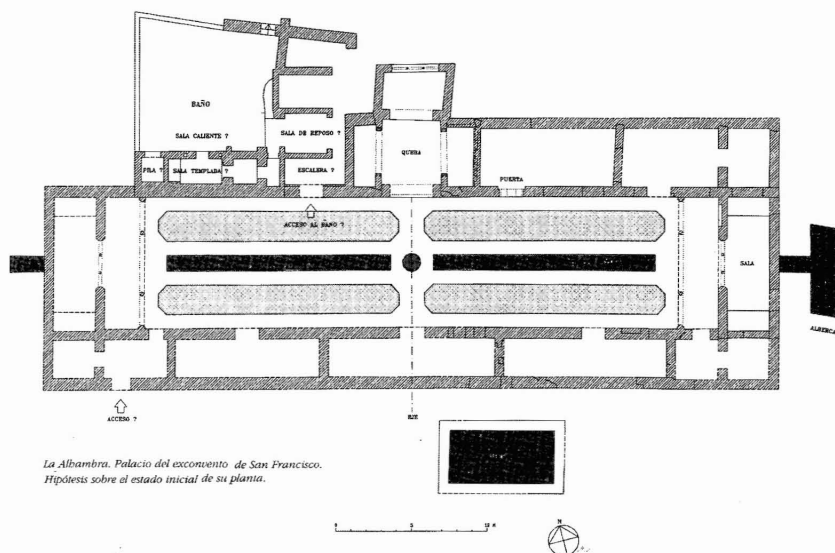


図10 旧サン・フランシスコ修道院、推定平面図（Orihuela）

アルハンブラの市街区には宮廷人の住宅のほか、宮殿の必需品をまかなう商店や工場があった。ガラス工房や陶器用の窯、なめし革工場、水車、貨幣鑄造所などの遺跡が発掘されているのである。この市街区で規模の点で王宮並の邸宅が2軒あり、一つが前述したアベンセラーへ宮、もう一つが旧サン・フランシスコ修道院、現国営ホテル『パダードール』（図1・⑥）である。現在の建築はイスラム時代のものでなく、グラナダ再征服後の1493年、カトリック両王がこの場所にあった邸宅をフランシスコ会に譲渡して生まれた同市初の修道院であり、それを取壊し16世紀に同会が新築したものである。ただし、イスラム時代の邸宅の一部であった展望楼とクッバが現存する。このクッバは、グラナダ大聖堂脇の王室墓廟・礼拝堂が完成するまではカトリック両王の埋葬場所であったことで知られている。

敷地は市街地中央部の小高い場所に位置し、しかも、その敷地内を『王の水路』が走る。この用水路は初代ムハンマド1世が整備した水路網の本管に相当し、この用水路を通り旧王宮や城塞へ水を供給している。こうした特権的な場所に位置する大きな敷地であることから、王族に関わる高い身分の邸宅が存在したであろうことが推測される。残されている装飾等から、ムハンマド2世、もしくは3世の時代の建設で、ムハンマド5世時に改造されたと考えられている<sup>9</sup>。

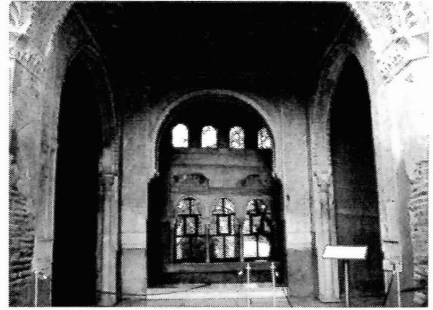


図11 旧サン・フランシスコ修道院、クッパ=展望楼

オリウエラの推定復元図（図10）によれば、イスラム時代の初期邸宅は細長の十字路パティオ（約35.5×8.5m）の東西の短辺に柱廊と両端にアルコーバを持つ広間、長辺北側中央に現存するクッパと展望楼（図11）を配す形式を取る。アベンセラーヘ宮と同じく、短辺の東西棟に主要施設が配置されたことであろう。同時に、北側中央のクッパもその構成からコアになるホールであったに違いなく、その望楼からは城壁内の庭園越しに、アルバイシンの眺望が享受できる。

十字路長軸にはその全長に細長い池が切られるが、ここにはそのまま用水路の水が流れていた。このシステムは同時代に建設され、しかも現存する離宮『ヘネラリーフェ』のそれと同一である。この長軸に水路のような細長の池を切る先例はセビーリャ王宮の『十字路パティオ』、おそらく同王宮『交易裁判所パティオ』にも見られたことであろう。

## 7.5 離宮『ヘネラリーフェ』、ムハンマド2世（1273-1302）またはムハンマド3世（1302-09）；同宮改造、イスマイル1世（1314-25）

ヘネラリーフェはイスラム時代の名称を踏襲しており、「建築家（工匠）の庭（果樹菜園）」を意味する。この場所にはムワッヒド朝時代（12-13世紀）の果樹菜園が存在し、そこには灌漑用貯水池と家屋があったという<sup>10</sup>。これをベースに休息を目的とした離宮が2代目のムハンマド2世により建設されたと考えられている。一部には3代目ムハンマド3世の作品とする説もある。確実なことは装飾

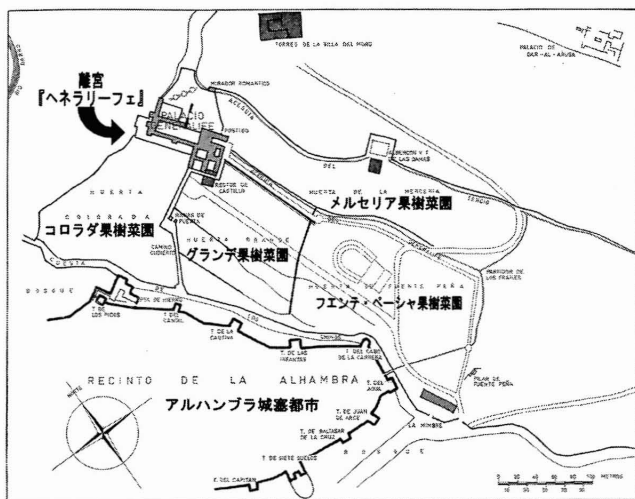


図12 ヘネラリーフェ、配置図 (Bermúdez Pareja)

に施された銘により、5代目イスマイル1世により戦勝を祝して1317年にパティオの北側棟屋を改造していることだ。この離宮の特徴は正に果樹菜園に取り囲まれていることにある(図12)。北側は険しい急勾配の傾斜地で菜園

には不適切ながら、眺望に恵まれる。西側は北から南にコロラダ、グランデ、そしてフエンテ・ペーニャの果樹菜園、また東側一帯にはメルセリア果樹菜園が広がる。東側と西側の果樹菜園を分けるように王の用水路が走り、メルセリア果樹菜園にもう一本の「テルシオ用水路」が流れ、両者は合流してアルハンブラの市街区と王宮、さらに城塞へと給水する。アルハンブラへの水路網が初代ムハンマド1世により整備されたとするならば、この水路を利用して計画された離宮『ヘネラリーフェ』はその後の王の建設と考えるべきであって、それ以前のムワッヒド朝時代の遺構に重きを置くことはできないであろう。

ベルムーデス・パレーハは、土地の痩せていることからこれらの果樹菜園ではもっぱらオリーブが栽培されていた、と推測する<sup>11</sup>。ビルチェスは14世紀のグラナダの歴史家アル・ジャティブからの引用として、「スルタンの所有地で採れる新鮮な野菜や美味しい果物やよりすぐった果実で店を満たす」と述べ、この「所有地」はヘネラリーフェの果樹菜園を指すとする<sup>12</sup>。また、グラナダがキリスト教徒により再征服されてから9年後の1501年、ブルゴーニュ公フィリップ美公(1478-1506、後のカスティーリャ王フェリーペ1世)に伴い1501年グラナダを訪れたモンティニー領主アントアン・デ・ラレンもまた、次のような記述を残し

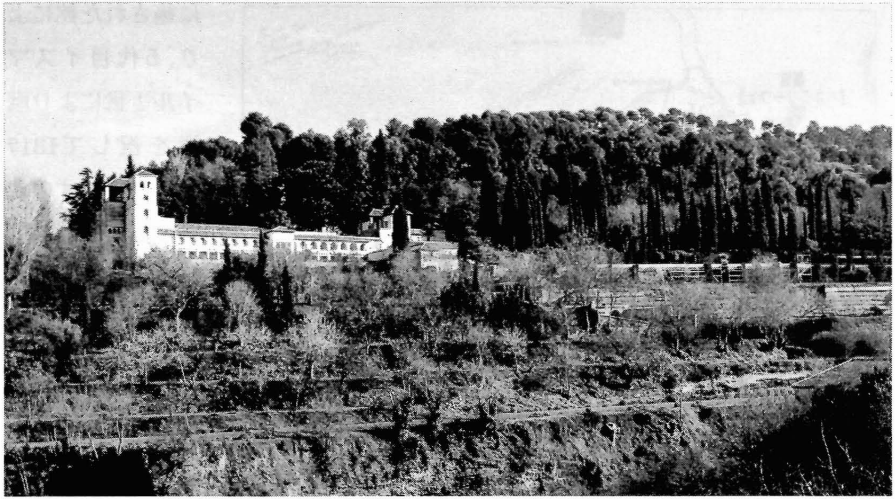


図13 ヘネラリーフェ、アルハンブラからの外観

ている。

「前記の要塞（アルハンブラ）の少し上、前記した山（太陽の丘）は美しいなかでも美しく、過度なほど手の入ったヘネラリーフェと呼ばれる庭を持つ。あらゆる種類の見知らぬ果実で満たされ、たくさんの垣根が作られ、多様な噴水が湧き出ている。その端には良く細工が施され、イスラム風に金色に塗られた天井を持つ大変美しく、完成度の高い建物が見られる。」<sup>13</sup>（傍点は論者による）

さらに、1600年に出版されたグラナダの歴史家ルイス・デ・マルモル（1520-1600）の書でも、ヘネラリーフェの果樹菜園には「沢山の果樹が林立し、良い香りのする植物や花」があった、と記述されている<sup>14</sup>。これらからはベルムーデスの痩せた土地という推測を容易に受け入れるわけにいかない。確かなことは果樹菜園のなかに離宮が存在し、ヘネラリーフェの名称自身が「果樹菜園」を意味するほど、この離宮は果樹菜園と密接な関係にあることだ。こうした果樹菜園で囲まれて離宮ヘネラリーフェは存在する。

図14は1959年の発掘調査の結果にビルチェスが修正を加えた中世の離宮平面推定図である。現況と大きく相違する点は、『水路のパティオ』の北東に位置する現『スルタン妃のパティオ』には未発掘ながら浴場が存在したこと、同じ『水路のパティオ』の西側外壁に位置する現柱廊が存在せず、唯一展望台のみが存在し



たこと、また東側に広がる現庭園部はメルセリア果樹菜園に含まれ、モスク（礼拝堂）に達すると推測される『水の階段』のみが存在したことなどであろう。離宮への入口には南側の上入口と南西部の下入口が想定され、前者に関してはそれに達する前に表玄関の門が存在したと考えられる。下入口はアルハンブラからは

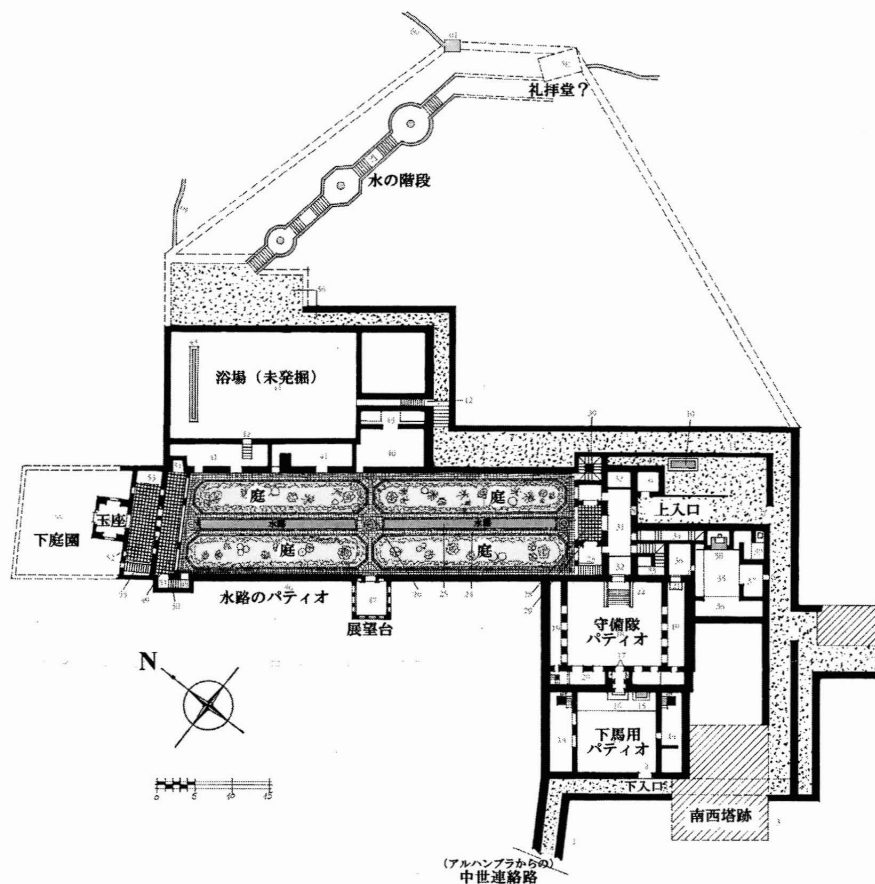


図 14 ヘネラリーフェ、中世の離宮推定平面図（Bermúdez Pareja と Vílchez）

最短距離の道に接続され、騎馬を前提とする下馬用パティオと警備を目的とした守備隊パティオを通り、南棟地階の西玄関に達する。これら2つのパティオは極めて機能的であり、パティオという面で構成されるイスラムの空間構成が如実に

反映する。小さな西玄関を入ると左手に階段があるのみで、この薄暗い階段を登ると、予期せぬ水と緑の空間が目の前に現れ、訪問者を驚かす。これが離宮の中心となる『水路のパティオ』（図15）である。南棟は玄関棟に相当するものだが、改造が激しく、中世の面影は余り遺されていない。北棟は15世紀末キリスト教徒により増築された2階を除き、保存状態が良く、前廊、両端にアルコーブを持つ



図15 ヘネラリーフェ、水路のパティオ

ホール、そして中央北側に突出するクッパ建築「玉座の間」の三部構成もイスラム空間構成の典型と言えよう。

『水路のパティオ』の水路は、初代のムハンマド1世が最初に建設した用水路そのものであり、ここを通った用水は、その後アルハンブラに入り、旧フランシスコ修道院のパティオを流れた水路を通過し、王宮に水を供給しながら、要塞部まで達するアルハンブラの生命線に等しいものであった。したがって、もっとも新鮮な水がここを流れることになる。現在ではこの水路の両側の噴水から水の連続アーチが作られ、この離宮の最大特徴となっているが、これは1910年代に設置されたものであり、そしてその池は19世紀末頃から1958年までは細長い水路が切

られるだけであった。この年の火災で東側棟屋が消失したのを契機に発掘調査がなされ、その結果、現況の十字路パティオが判明し、復元された。

図16のパティオ横断面図はその発掘調査の結果であり、左側が当時の状態を図式化したもの、右側が土壌断面の説明図である。中央の窪みが池（＝水路）の断面であり、その両端のコンクリート躯体上部の水面の位置に12本の排水管が埋め込まれ、そのうち保存されていた7管はイスラム時代のものであった。これは庭への散水用であり、その位置から下の45cm程の層が庭園用の黒土、その上に70cm程の瓦礫が載り、底は植栽には不適切な石だらけの固い地盤であった。また、その地盤には植樹用の円筒状の穴が不規則に掘られていた。これらのことから、床面から30cm程下がった位置に草花や低木からなる庭園があり、所々に糸杉やオレ

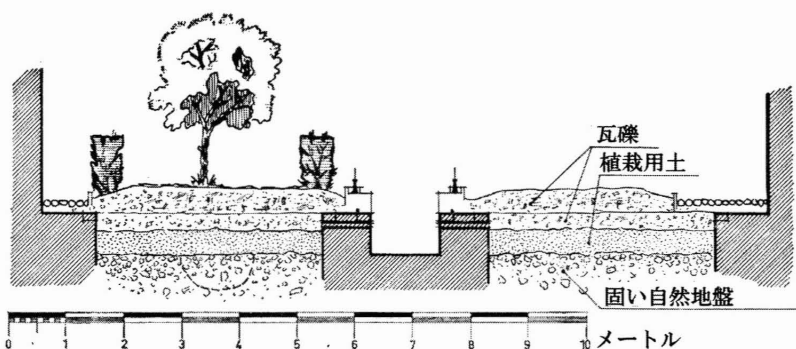


図16 ヘネラリーフェ、水路のパティオ、断面図 (Bermúdez Pareja)

ンジなどが植樹されていたことが推測される<sup>15</sup>。したがって、セビーリャ王宮に見られた掘り下げられたパティオではなく、前廊や通路の床面とほぼ同じ高さに位置する庭園であった。

また、この発掘では中央で交差する横軸の通路が水路の上に架けられ、西側の展望台入口前から水路の西側縁まで鉛管が埋設されていたことが確認された。これは交差部中央に存在した噴水への給水管であり、交差部には噴水のほか、東屋も存在した。この東屋の存在については19世紀半ばの記述や図版でも見られ、19世紀まで存続した<sup>16</sup>。こうしたことから現況の十字路パティオが復元されたものの、一度復元された交差部中央の噴水は現在見られず、同じ位置に存在したはず

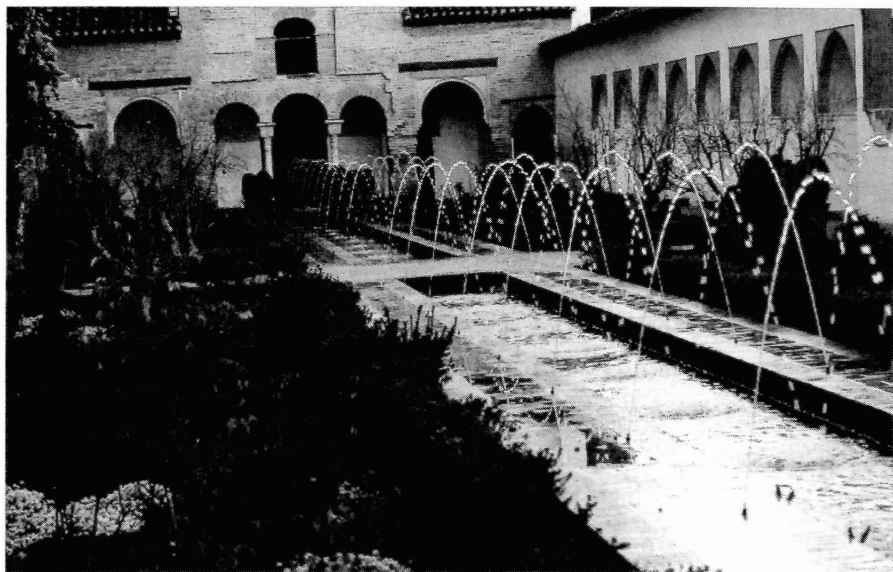


図17 ヘネラリーフェ、水路のパティオ、十字路交差部

の東屋は復元されなかった（図17）。

14世紀グラナダの隣県アルメリア出身の同市で活躍した苦行者、哲学者、法学者、かつ詩人でもあったイブン・ルユン(1282-1349)は他界する前年の1348年、農業の書である『農法に関わる知恵の美と目的の原理書』を著す。中世スペインのイスラム農法に関わるこの貴重な書は、農法の4大要素として「農地」、「水」、「肥料」、および「農作業」を挙げ、それらを解説する150項目、および最後の7項目の付録で構成される。付録最後の157項のみが農業とは直接関係しない次のタイトルを持つ。すなわち「庭園、住宅、および農作業小屋の配置法について」であり、以下がその前半部である。

「庭々のなかの家の配置は警備と監視が容易になるよう高台を選ぶべきである。建物は南向き、すなわち地所への入口に向くようにし、最も高い場所に井戸と池を備えるか、もしくは井戸以上に、日陰の場所を流れる用水路を敷く方がよいであろう。住宅はより安全で住民に最大の休息が得られるよう二つの扉を持つべきである。」

「池のところには常に緑に満ち、目を楽しませてくれるよう草木が植えられる。

少し離れた所には花壇や常緑樹を設けなければならない。地所はブドウ園で取り囲まれ、そのなかを巡る散歩道にはブドウ棚が設けられる。」

「庭は地所のその他の部分から切り離すことを目的にこれら散歩道の一つに絡ませなければならない。ブドウ畑の他、果樹林にはエノキやこれに類似する樹木もなければならない。なぜなら、それらの材木は有益であるからだ。」

「ブドウ畑から少し離れたところの地所の残った部分は耕作地とする。そうすれば、種まきしたものの収穫が得られよう。」

「地所の境界にはイチジクやそれに類する樹木を植える。大きい果樹はすべて、防風林として地所を風から守る目的で北側に植えるべきである。地所の中央には座る場所が備わり、四周を眺望できるパビリオン(東屋)がなければならない。ただし、東屋に入る人は、なかにいる人の話し声を聞くことができず、また東屋に向かう人は、気付かれずには通れないようにする。東屋はバラの生け垣、あるいは銀梅花の生け垣や果樹花園にふさわしいあらゆる植物で取り囲む。幅よりも奥行きを長くし、視野が見る方向に広がるようにする。」<sup>17</sup> (傍点は訳者による強調)

この最後の段落に関しては、同じアラビア語からの訳者エウガラスが次のようにもスペイン語に訳している。

「庭の中心には東屋がなければならない。それは休息したり、四周を眺望したりする人たちのためである。ただし、そこに入る人は、なかにいる人の話し声を聞くことができず、また誰にも気付かれることなく入ることができないようにする。東屋はバラや銀梅花の生け垣と庭を飾るあらゆる植物で取り巻かせなければならない。この庭は幅よりも奥行きを長くし、視野が見る方向に広がるようにする。」<sup>18</sup> (傍点は訳者による強調)

二つの訳の最大の相違点は、東屋の位置が「地所の中心」なのか、あるいは「庭の中心」なのかの違いであろう。前者の「地所」と訳したフィンカ finca は、「田舎もしくは都市の所有物」、特に、「山や湖、その他の自然や家などを含む相当に広い所有地」を意味する。広大な農耕地や狩猟場であったり、あるいは広い土地付きの邸宅や別荘であったりする。いずれにしても、ある程度の広さの所有地であることが原則であり、都市においても少なくとも庭をもつような屋敷でないと、この言葉は使用されない。イブン・ルユンの記述でもこの「地所」は農耕地を含む広大な土地に複数の庭と複数の散歩道の存在することを前提とする。ま

た「東屋」の記述からはその周辺が自然に開かれた場所、すなわち「庭」に位置することが推測される。このように考えると、両者の文章の意味するところは同じであり、後者は意識と考えられるし、最終文の主語は「東屋」の位置する「庭」と推測される。また、アラビア文学者ガルシア・ゴメスの訳では、「東屋」はただ「中心」とするだけで、どこの中心であるのかを特定せず、最終文の主語には同じ「庭」を挿入するものの、「庭 jardín」ではなく、「果樹花園 vegetal」の訳語を当てている<sup>19</sup>。以上のような注釈を加えたうえで、引用文を再読すると、果樹菜園に囲まれたヘネラリーフェを念頭に記述されているように見える。すなわち、離宮『ヘネラリーフェ』は14世紀ナサリ王朝での屋敷形式の雛型というか理想形であったであろうことが推測されるのである。ただし、『水路のパティオ』の中心に存在した「東屋」からは四周を眺望することはできない。しかしながら、パティオ西壁中央に設けられた展望台からは手前の果樹菜園越しにグラナダの旧市街を背景とするアルハンブラの絶景を享受できる(図18)。また、北側に突出したクッ



図18 ヘネラリーフェ、西側展望台、開口部からの借景

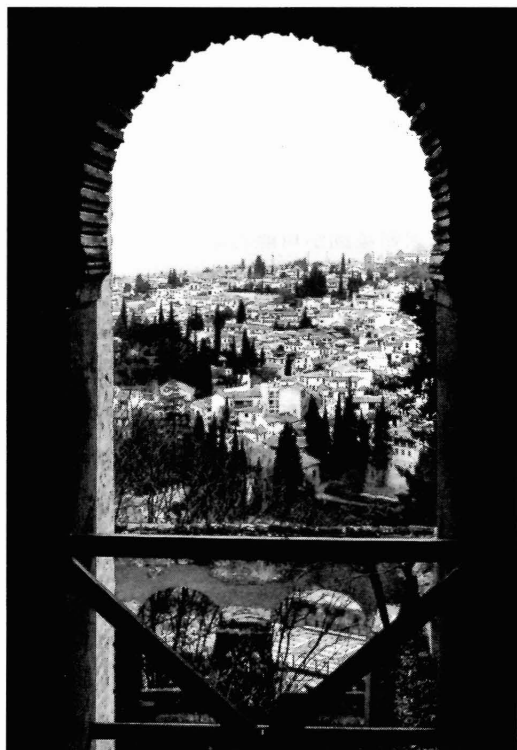


図19 ヘネラリーフェ、北棟開口部借景

バの「玉座」からも、足元の庭園越しにグラナダの旧市街からサクラモンテの眺望を楽しむことができるのである（図19）。これらは正しく借景であり、ヘネラリーフェそのものが庭園のなかの「東屋」でもあるのだ。

本稿（1）で既述したように、「果樹菜園」は「庭」の語源になった用語であり、壁に囲まれた大規模の果樹園や菜園を意味する<sup>20</sup>。そしてこの果樹菜園のなかに壁で囲まれた一角を形成し、そのコアに十字路のパティオ『水路のパティオ』を配したものがこの離宮である。パラダイス（楽園）の語源はペルシア語のパエリダエザ「囲われた場所」にあり、同じく本稿（1）

で紹介したように、古代ペルシ

ア人は「庭園のなかの庭園」を意味する「四分庭園」<sup>チャハル・バグ</sup>を楽園とした。この伝統を継承したイスラムの庭園でも、「四分庭園」である「十字路パティオ」は楽園を象徴した<sup>21</sup>。こう考えると、ヘネラリーフェ離宮の果『水路のパティオ』は二重三重の意味でパラダイス（楽園）に関連するように思える。<sup>パラダイス</sup>

そもそも、「果樹菜園」が楽園である。その楽園のなかにさらに壁で囲まれた『水路のパティオ』もまた楽園である。かつ、その四分庭園という形式もまた楽園なのだ。かつまた、「十字路パティオ」中心の交差部への東屋や噴水の設置もペルシアとイスラムに共通する楽園の表現でもあった。

中近東の乾燥地帯では緑地やオアシスはそれ自身ですでにパラダイスであり、この自然条件から庭園＝楽園の図式が形成されたに違いない。したがって、パラ

ダイスの外側には乾燥した地域が広がっていることが前提となろう。この意味からすると、グラナダのイスラム世界は全く相違する。ダロ川とヘニル川に広がる沃野であり、中世のイスラムではグラナダ自身が楽園と見なされていた。

しかしながら、ヘネラリーフェは小高い「太陽の丘」に位置し、そこには川の水は届かず、かつては地中海の禿山の様相を呈していた。この地に『王の水路』を開設することにより、ヘネラリーフェの果樹菜園が可能となった。今でこそ、緑に恵まれた立地条件に見えるが、人工の結果であり、正に楽園作りであったのである。このことは、実はグラナダについても言えた。イスラム時代の11世紀になり、盆地の平地にはダロ川とヘニル川からの用水路を整備し、小高い丘のアルバイシン地区とその周辺にはアグファグアラ山脈の湧き水を水源とした用水路を建設することにより、それまでの城砦地グラナダは農耕可能な緑地に変わり、都市が形成され始めたのであり、13世紀のナサリ王朝創設者ムハンマド1世による「太陽の丘」からアルハンブラに位置する「サビカ」の丘に『王の水路』を巡らせることにより、この一体も緑豊かな楽園の様相を呈すようになった<sup>22</sup>。

かくしてナサリ朝のグラナダは、宮殿の林立する豊かな水で灌漑され庭園に囲まれた田園都市に変貌したのである。14世紀同王朝の首相、かつ詩人、歴史家、哲学者、医者でもあったイブン・アル・ジャティブ（1313-74）は次のようにグラナダを讃えている。

「神の御加護になるこの都市の城壁を、個人所有の大きな庭園やよく茂った樹木が取囲み、これらの背後にある城壁は、堅固な市域を形作っているにもかかわらず、消失したかのように思える。その緑の上に、高き建物が星々のように輝いている。このことを、かつて次のような詩に読んだことがある。

『(グラダナは)美しい青年の顔の薄い口ひげのように、庭園に囲まれた都市である。』

『川は女の子の手首のようであり、そこに架かる橋は腕輪のようだ。』

「その周辺はブドウ畑や果樹菜園に恵まれていないどころか、その反対で満ち溢れている。そうした畑や菜園は極めて重要なもので、その価値はそこから得られる高額の収益により王国に敵対する人々を矮小化させる。というのも、特にスルタンの所有地で採れる新鮮な野菜や美味しい果物やよりすぐった果実で店舗を満たし、たったの1年で一千金貨の収益を得ているからだ。」



「こうした果樹菜園や庭園は、都市のあばら骨のように散在しており、その数は100にも達する。(以下、菜園や庭園の具体名が挙げられ、その最後にアルハンブラとヘネラリッフェの庭園がリストアップされている)」<sup>23</sup>

前掲したビルチェスによるヘネラリーフェの果樹菜園での収穫の推測はこの文に依拠しているのだが、この文からは14世紀のアルハンブラやヘネラリーフェから眺望できるグラナダが緑豊かな都市であり、乾燥地帯のアラブ人から見れば楽園のような景観であったであろうことが、容易に推測される。

またタンジール（モロッコ）出身の旅行者イブン・バトゥタフ（1377-78年没）も、1325-49年に当地に滞在し、次のような記述を残している。

「その（グラナダ）周辺はいかなる世界にも比類なきものであり、有名なヘニル川やその他の多数の川に刻まれた40マイルの空間に広がる。庭、果樹園、牧草地、あるいは菜園、お城や大ブドウ畑がグラナダの全域を取り囲む。それらのもっとも美しい場所のひとつが『涙の泉』と呼ばれる山であり、そこには果樹菜園や庭々が見られる。他のいかなる都市も同様の誉れに与ることはないであろう。」<sup>24</sup>

ここに出現する『涙の泉』は正にイブン・アル・ジャティブ所有の屋敷であったか、もしくは将来そうなる場所であった。このように当時のグラナダが緑豊かな楽園のような田園都市であったとするなら、ヘネラリーフェは内に楽園を持ち、外にも楽園を持つ、文字通り、楽園のなかの離宮であったと定義付けができるように結論される。

「世界で最も大きく美しい詩の本」とはアルハンブラの別称である。これはアルハンブラの三大壁面装飾手法にアラビア文字による装飾があり、その言葉でコーランの一節やアルハンブラの建物を讃える詩が刻まれているからである。石膏によるこの銘装飾はヘネラリーフェでも例外ではない。この銘の一つがヘネラリーフェを展望台であると詠っているのだ。『水路のパティオ』北棟前廊の水瓶用のニッチにはこう刻まれている。

「至福のサロンの扉口のタカ（ニッチ）は、展望台で陛下に供するもの。神よ、比類なき王の右手に立ち現われる（ニッチの）姿は、何とも美しい。そこ（ニッチ）に姿を見せる水瓶は、高みに上る乙女のように。」<sup>25</sup>（傍点は訳者による強調）

アルハンブラでの重要な部屋に共通する特徴は、入口のアーチ両側にニッチが

設けられていることである。この銘により、ニッチが水瓶用だと判明する。銘の「王の右手」とは玉座（クッパ）から見て右側、すなわち前廊から入って左手のニッチを指し、この銘はそこに刻まれている<sup>26</sup>。そして、この銘によれば、北棟サロン、もしくは離宮そのものが「展望台」と規定されていることになる。

最後に、次の点に注目することを促したい。『水路のパティオ』は南棟と北棟、および東西の壁で閉じられた空間であり、それ自身で完結した庭園である。しかし、西側の展望台や北側のサロンやクッパに行けば、視野は外側の果樹菜園や緑豊かな市街区の眺望を享受でき、空間は開放される。この開放された空間は、ある意味で、内部空間ではない。内部の庭から外部の庭への通過装置に過ぎない。それ故、ヘネラリーフェの離宮それ自身が、庭園のなかの東屋、すなわち「展望台」とでも定義できそうな建築と庭の関係にあらうと判断される。

### 『水の階段』

この階段は離宮の裏側、北東側に登る斜面に位置する。高みには小モスク（礼拝堂）が存在したと推定されており、そこへ達するための階段がこの『水の階段』とされる。1526年に訪れたヴェネツィア共和国大使アンドレア・ナヴァジェロ（1483-1529）の記述からもこの階段は知られており、イスラムの時代から存続したであろうと推測される。ただし、現在のものとは必ずしも一致する記述ではないので、下記にその全文を紹介する。

「これらの場所（ヘネラリーフェの庭園やパティオ）の最上部の庭園には、広場に上る幅広の階段がある。宮殿に流れるすべての水は、その広場にある一つの大岩から湧き出ており、いつ、どのように、またどの量でも水を流すことができるよう、開閉栓でここに溜められている。階段は次のように工夫されている。踏み段は集水できるよう穴が穿たれており、両側の手摺は細工された笠石を頂き、その笠石は上から下に流れる水路を形作る。高みにはこれらの部分それぞれに独立した開閉栓があり、望むならば、手摺を流れる水の開閉栓を、また時には踏み段に注ぐ水の開閉栓を開くことができ、あるいは双方同時に開くこともできるし、さらには水量を増し、すべての階段を水没させたり、この階段を上る人々をずぶ濡れにさせたりして、色々な遊びや戯事をすることもできる。」<sup>27</sup>

この記述には、現在のように階段上の広場の存在が指摘されているものの、小

モスクの存在は触れられていない。しかし、このことで小モスクがすでに存在しなかったとは断定できるものではない。逆に現存しないものの記述が見られる。それは踏み段に穴が穿たれていることで、この穴は水を集めると同時に、流出させることもできる。恐らく、穴の下にも水路が走っており、この水路の水を閉鎖したときには、手摺の水路から溢れる水をこの踏み段の穴から排水し、逆に、開閉栓を解放したときには、同じ穴から水が流れ出たことであろう。同じナヴァジェロの書簡<sup>28</sup>によれば、この穴はすべての踏み段に穿たれていたというから、両者の水路を全開したときには、この引用部に見られるように、階段全体が滝のようにもなったことであろう。こうした庭園における水遊びを駆使した工夫はイタリア・ルネサンス以降の庭園に出現し、特にバロック庭園で最盛期を迎える。こうしたことから、アルハンブラの水遊びシステムがイタリアに影響したという



図20 ヘネラリーフェ、水の階段

説も存在する。イスラム時代のグラナダにはジェノヴァ商人を中心に多くのイタリア人が住んでいたからでもある。

しかし、現在の踏み段には一つの穴も存在しないが、各踊り場には噴水、もしくは噴水の設置を可能にさせる噴水口が見られる。訪問者は現在でもこれらの噴

水のしぶきと両側の手摺笠石の急流の水路から飛ぶ散る水しぶきとから逃げることは困難で、必ず水しぶきの餌食となろう。訪れた人は誰でも感嘆するように、夏のグラナダには最高の冷涼空間が提供されているのである。かつては、これら水しぶきのみならず、足元の階段を流れる水により、道行く人に心身の洗われる思いをさせたことであろう。これはモスクに入る前の清浄を意味するものと解釈できそうである。

神社仏閣には参拝する前に身体の清浄を目的とする御手洗（水舎）や手水舎（お水舎）があるように、モスクならそのパティオに洗淨用の泉が設けられている。夏の暑い日など、神社仏閣の水舎で水と戯れる子供のみならず、大人たちの姿さえ見られる。同じように、イスタンブールの暑い夏の日など、礼拝の時間になってもモスクに入らず、清浄用の泉に手足のみならず、体に水をかけて涼んでいる子供たちを見かける。文字通り身体を清めているのだが、水遊びにしか見えない。こう考えると、小モスクの存在があつてこそ、この『水の階段』の存在理由が説明されよう。『水の階段』は正に礼拝前に洗淨することを目的とする施設と想定できるのである。

アルハンブラでの水の様相には、池に淀む水、噴水の噴出する水、水路の緩やかに流れる水、そしてこの階段手摺のように、急勾配を落ちていく滝のように流れる水とそのしぶきなどがあり、それぞれの水の音色も相違する。水は命に必要な実用的な水のみならず、視覚、聴覚、そして触覚に感じる水としても存在する。

（続く）

---

1 拙稿「スペインの庭（1）」は『麒麟』（神奈川大学経営学部十七世紀文学研究会）、第18号（2009年3月）、108（13）－88（33）頁、「同（2）」は『国際経営フォーラム』（神奈川大学国際経営研究所）、No.19（2009年7月31日）、pp.215--43頁に掲載される。

2 Valladar, Francisco de Paula: *Guía de Granada*, Granada: Universidad de Granada, 2000 (1906年復刻版；初版、1891), p.255

3 Huici, A. (訳) : *El anónimo de Madrid y Copenhague*, Valencia: Hijos de F. Vives Mora, 1917, p.173 / Ibn al-Jatib, Muhammad b. Abd Allah (m. 1374):

- Historia de los reyes de la Alhambra = Al-Lahma al-badriyya : El resplandor de la luna llena*, Granada : Universidad de Granada, 1998, p.35
- 4 Fernández-Puertas, Antonio: *Historia de España, Menéndez Pidal VIII-4, El reino nazarí de Granada (1232-1492), sociedad, vida y cultura*, Madrid: Espasa Calpe, 2000, pp.212-13
  - 5 Vílchez Vílchez, Carlos: *El Palacio del Partal Alto en la Alhambra*, Armilla (Granada); Proyecto Sur de Ediciones, 2001, pp.36-37
  - 6 Malpica Cuello, Antonio; Bermúdez López, Jesús: "Transformaciones cristianos en la Alhambra", en *Acculturazione e mutamenti. Prospettive nell' Archeologia medievale del Mediterraneo* (Enrica Boldrini y Riccardo Francovich). Firenze (Italia), 1995. pp. 285-314.
  - 7 Orihuela Uzal, Antonio: *Casas y palacios nazaríes siglos XIII-XV*, Madrid-Barcelona: Lunwerg, 1996, pp.121-28
  - 8 Orihuela Uzal, Antonio: "Los inicios de la arquitectura residencial nazarí", *Casas y palacios de Al-Andalus*, Madrid - Barcelona: Lunwerg Editores S.A., 1995, pp.225-39
  - 9 Contreras, Rafael: *Estudio descriptivo de los monumentos árabes de Granada, Sevilla, y Córdoba (Del arte árabe en España manifestado en Granada, Sevilla y Córdoba por los tres monumentos principales, la Alhambra, el Alcázar y la gran Mezquita)*, Granada: Indalecio Ventura, 1875, p.140-1
  - Oliver Hurtado, José y Manuel: *Granada y sus monumentos árabes*, Málaga: 1875, pp.356-7
  - Momplet Míguez, Antonio E.: *El arte hispanomusulmán*, Madrid; Ediciones Encuentro, 2004, pp.170-71
  - 10 Vílchez Vílchez, Carlos: *El Generalife*, Granada; Proyecto Sur de Ediciones S.A.L., 1991, p.21
  - 11 Bermúdez Pareja, Jesús: "El Generalife después del incendio de 1958", *Cuadernos de la Alhambra* (Granada), No1 (1965), p.15
  - 12 注10の書、Vílchez Vílchez (1991), P.24
  - 13 Antonio de Lalaing, señor de Montigny (1480-1540): "Primer viaje de

- Felipe el Hermoso a España en 1501”, en García Mercadal, J.: *Viajes de extranjeros por España y Portugal, desde los tiempos más remotos, hasta fines del siglo XVI* ( Recopilación, traducción, prólogo y notas por ----), Madrid: Aguilar, 1952, Tomo I, pp.474-77
- 14 Mármol Carvajal, Luis del: *Historia del rebelión y castigo de los moriscos del reino de Granada*, Málaga, 1600 (Real Academia de la Historia, 1797); Biblioteca de Autores, *Historiadores de sucesos particulares* (Vol.XXI, pp.123-365), Málaga: Editorial Arguval, 2004, pp.38-39
- 15 注11の報告、Bermúdez Pareja (1965), p.28
- 16 同上、注37と56を参照。
- 17 Eguaras Ibáñez Joaquín: *Ibun Luyūn: Tratado de Agricultura*, Granada: Patronato de la Alhambra y Generalife, 1988, pp.272-73
- 18 注11の報告、Bermúdez Pareja (1965), p.27
- 19 García Gómez, Emilio: *Silla del moro y nuevas escenas andaluzas*, Buenos Aires: Espasa-Calpe Argentina, 1954, p.72. 以下が相当部の訳である。
- 「中央には座る場所を備え、四周を眺望できるパビリオン（東屋）<sup>あずまや</sup>があろう。ただし、東屋に入る人は、なかにいる人の話し声を聞くことができず、また東屋に向かう人は、気付かれずには到達できないようにする。東屋はバラの生け垣、あるいは銀梅花の生け垣や果樹花園にふさわしいあらゆる植物で取り囲む。この果樹花園は幅よりも奥行きを長くし、視野が見る方向に広がるようにする。」（傍点は訳者による強調）
- 20 注1 参照。「スペインの庭 (1)」、pp.(17) 104- (18) 103
- 21 同上、pp. (28) 93-(29) 92
- 22 Malpica Cuello, Antonio: *La Alhambra, ciudad palatina nazarí*, Málaga: Editorial Sarriá, 2007, pp.17-18
- 23 Rubiera, María Jesús: *La arquitectura de la literatura árabe*, Madrid: Ediciones Hiperión, 1988 (初版, 1981), pp.141-42
- 24 Ibn Batutah (Abu Abd Allah Mohammad) de Tánger: *Viaje por Andalucía*, 注13の書, García-1952, Tomo I, p.230
- 25 Borrás Gualis, Gonzalo M.: *La Alhambra y el Generalife*, Madrid: Ayana, 2005

(1989, 1<sup>ed.</sup>), p.66

- 26 García Gómez, Emilio: *Poemas árabes en los muros y fuentes de la Alhambra*, Madrid; Instituto Egipcio de Estudios Islámicos, 1996 (1985, 1<sup>ed.</sup>), p.152.  
ただし、この引用部銘に相当するガルシア・ゴメスの訳は以下となる。

「喜ばしきサロンの扉口のニッチは、陛下の御前、陛下に供するもの。この比類なき王の右手に位置するたたずまい、その美さの何とも偉大なこと。その水瓶は、婚礼の時に式台上る乙女のように。」(同書、p.151)

この訳では「展望台」という用語が消えているものの、ガルシア・ゴメスの弟子でもあるルビエラ訳では、以下のように「展望台」が出現している。

「展望台としての至福のサロンのアーチは、陛下に供するもの。神よ、無比の王の右手に立ち上がる姿は、何とも美しい。そこに姿を見せる水瓶は、高みに上る乙女のように。」(注23参照、Rubiera -1988, p.147)

ただしガルシア・ゴメスによると、ここでの訳語「アーチ」は「タカ」すなわち「ニッチ」を意味し、後者の訳語の方が有力とする。また、同じくガルシア・ゴメスの弟子の以下の最近書でも「展望台」が含まれる。

Santiago, Emilio de: *La voz de la Alhambra*, Granada; La Biblioteca de la Alhambra, 2009, p.139

- 27 Andrés Navagero: “Viaje por España”, 注13の書, García-1952, Tomo I, pp.854-57

- 28 ナヴァジェロは旅行記の他、旅行中にイタリアへ送った書簡集も遺しており、その1通の書簡ではこの『水の階段』が以下のようにより簡潔に説明されている。

「庭園の上部には高台に上る幅広の階段がある。その高台にある一つの大岩から宮殿へ送られるすべての水が湧き出ており、そこでは、いつ、どのようにも水を供給できるよう何種類かの開閉栓が管理されている。階段は次のようにできている。すべての踏み段には集水用の穴が穿たれており、両側の手摺は溝の刻まれた笠石を頂く。高みにはそれぞれ独立した開閉栓があり、要望に従い、手摺、もしくは踏み段の溝だけに、あるいは双方同時に水を流すことができるし、また、たくさんの水を湧き出させ、用意された水路から溢れてすべてをびしょ濡れにし、踏み段を洗い、こうしたいたずらで、上ってくる人を濡らすこともできる。」(前注27の書、pp.886-87)